

# 平成11年度国語部会研究主題

## 1 研究主題

### 生きる力をはぐくむ国語科授業の創造

— 単元学習の理念を生かし、主体的・自覚的にことばを学ぶ子どもを育てる指導のあり方 —

単元学習とは、子どもの興味・関心・必要感に根ざす話題をめぐって組織されるひとまとまりの価値ある活動を通して行われる学習である。子どもが主体的に活動する場を通じて獲得したことばの力は、学ぶ力や生きる力を適正に育て得るものとなっていく。本研究では、単元学習の理念を生かし、主体的・自覚的にことばを学ぶ子どもを育てることが、生きる力をはぐくむことになると考え、子ども主体の授業を創出しようとしている。

## 2 研究主題設定の理由

教育課程審議会から出された「指導要領改善の基本方針」には、「豊かな言語感覚を養い、互いの立場や考えを尊重してことばで伝え合う能力を育成することに重点をおいて内容の改善を図る」と述べられている。そして、生きる力に培う国語の力として、①「自分の考えを持ち、論理的に意見を述べる力」、②「目的や場面などに応じて適切に表現する力」、③「目的に応じて的確に読みとる能力や読書に親しむ態度」が挙げられている。12月に告示された新指導要領にも、相手意識や目的意識を持つことが繰り返し述べられ、一人一人の子どもが言語主体として生きていく力を身につけていくことが強調されている。これからの社会を主体的に生きていく力を身につけさせるために、自己の思いをことばで表現し、ことばによってまわりの人たちとかわっていくことができる子ども、人とのかわりの中で生きていく子どもを育てることが、国語科に求められているのである。

本会では、平成9年度より「生きる力をはぐくむ国語科授業の創造」を主題として、実践研究に取り組んできた。「単元学習の理念を生かし、基礎・基本を見据えた指導のあり方」（平成9年度）、「単元学習の理念を生かし、一人一人を見つめる指導のあり方」（平成10年度）を探究してきた。これらの積み重ねは、まさしく「指導要領改善の方針」に示された、これからの国語教育の方向と一致するものであった。また、取り組みの中で、言語主体として生き生きと活動している子どもの姿が見られたり、「国語の時間は楽しい」「単元学習はおもしろい」という声が聞かれたりするようになった。「生きる力」を育てるうえで、単元学習の理念を生かした学習を展開することの効果や重要性が、確認されることとなったのである。

本年度は、この昨年度までの研究をさらに深め、言語主体としてことばを自覚的に学んでいく「ことばの学び手」としての子どもの育成をめざしたい。

## 3 研究主題についての考え方

### (1) 研究主題について

「生きる力」とは、中央教育審議会答申で示された通り「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動することによって、よりよく問題を解決する資質や能力」と「自

らを律しつつ、他人を思いやる心や感動する心を持った豊かな人間に備わった力」であり、子どもが主体的・自覚的に学習をする中で育成されるものである。国語科において、それらは次のような力に分析されている。

- ①自らの言語生活を豊かにしていく力（生活に根ざす言語についての知識や運用の力）
- ②言語文化を享受し、創造する力（言語による文化を味わったり、創り出したりする力）
- ③コミュニケーション能力（人間理解能力を土台とした相互啓発力）
- ④情報を活用し産出する能力（情報を受容するだけでなく、自分の中に生かしていけるよう再構成する力、情報化社会に生きる情報操作力）
- ⑤言語による思考力（感じたり、思ったり、考えたりしたことを言語でとらえる力）

このような力を一人一人の子どもに身につけていくことが、生きる力をはぐくむことになる。また、他とのかかわりの中で個を生かしていくことができる子ども、あるいは、他とのかかわりの中で自らを育てていくことができる子どもを育成することが、今、強く求められていることから、これらの力の中でも、特にコミュニケーション能力の育成を心がけたい。

## （2）副主題について

こうした子どもの生きる力は、学ぼうとする態度と指導者の支援・指導が同時に働くことによって、一人一人の子どもに身についてくるものである。そのために、わたしたちは、単元学習の理念を生かした授業を追求してきた。

単元学習は、一定の学習方法や形態を示すものではない。昨年度の研究大会での発表にもあったように「型にはまらないのが単元学習」なのである。一つの教材を中心とした学習も、関心・意欲を持たせて、導入から目標に即した展開、発展へと進むとき、子どもの、未知を求め、人間を探ろうとする、あるいは自分自身を見つめようとする主体的な欲求に支えられた学習の活動として成立するならば、それはまさしく単元学習である。反面、複数の資料を用意し、手広く情報を処理する活動を設定しても、その活動が子ども自身の問題を解決したり追求したりする行為になっていなければ、単元学習ということができない。単元学習の理念を生かすとは、そこでの学びが、その子にとって価値ある課題として、学習の対象に据えられているかどうかによるのである。昨年度の研究発表の指導案や提案発表の中で、「実の場を作り出す」「子どもの言語生活に働きかける」「その子らしさを見つめる」といったことばが、指導者にごく自然に使われるようになってきたところに、この単元学習の理念が定着しつつあるのを感じた。

また、昨年度の副主題「一人一人を見つめ」を受け、学び手としての子どもを理解することから始まったさまざまな実践が報告された。会場校からは、①身につけさせたい能力の把握、②一人の子どもの大切にすることからの実践、③国語能力表を生かした評価と学習記録の蓄積、④指導者自身の言語活動を通して子どもの認識過程を知ること、に心がけた提案授業や研究発表がなされ、「一人一人を見つめた」単元や1時間の授業はどうあるべきかが示された。中でも「その子にとっての基礎・基本」を的確に把握するための国語能力表は、今後、単元を構想しようとする指導者にとって、大きな指標となる得るものである。

このうえに立ち、本年度は、さらに主体的・自覚的にことばを学ぶ子どもを育てることに目を向けていきたい。

「ことばを」としたのは、言語の教育としての国語科の意義を明示するとともに、「生きる力」に培う「ことばの力」の育成を重視したためである。今後の課題である総合的な学習に取り組むことは、それぞれの教科等の持つ本質・意義を問うことから始まる。それだけに、国語科の役割や、「その子にとっての基礎・基本」をしっかりとらえ、指導することが大切になる。

「主体的・自覚的に学ぶ子どもを育てる」としたのは、学習を通じて知識や技能を身につけるためには、持つべきことに関心を持たせ、生涯学び続ける意欲・態度を育成していかなければならないからである。学習の根底に関心・意欲があり、学習の結果身についた態度が自己に確認されることによって、学ぶ力（自己学習力）が育つのである。これまで「主体的」な活動を求めてさまざまな単元が構想されてきたが、その展開の中で自己の生き方に関わるものとしてことばを学ぶということがなくては、自己学習力は育たないであろうし、「言葉の力」も充分には身につかないであろう。「生きる力」を育むうえで、「主体的」とともに「自覚的」ということに重きを置きながら、単元を構想し、指導・支援の方法を探るのが肝要である。

これらのことから、「主体的・自覚的にことばを学ぶ子ども」とは、たとえば

- ① 自己のことばの生活の中から、価値ある課題を発見する力、また、そうした課題を育てていく力や問い続ける力を有する子ども
- ② 自己の課題を解決するために、自分に必要な情報を集め、選び、自分なりの考えを創り出し、それをまわりの人に伝える子ども
- ③ 一人で考えるだけでなく、自分の考えを伝え合いながら、よりよい考えを創り出していくために話し合う子ども
- ④ 一連の学習を通して、自己の学びの過程や成果を確認することができ、新たなる学びへの意欲へと変えていく子ども

などが考えられる。一人一人の子どもの中に、「主体的・自覚的にことばを学ぶ」活動が成立するような、単元を構想し、実践していくようにしたい。

#### 4 研究の内容と方法

- (1) 子ども一人一人の生活を見つめ、その興味・関心・必要感、及び国語の力の実態を的確に把握して、言語主体としての自覚を高めることをめざした単元を構想する。そのためには、子どもが自らの課題を主体的に解決し、自己実現を図ることができるような単元を構想し、授業を展開していくことが必要である。子ども一人一人の興味・関心・必要感に根ざした「課題」を設定することに心を砕くとともに、個に応じたさまざまな学びが成立するような「場」を設けることや、目的に応じて学習材を作り出し編成していくことについても十分留意していく。
- (2) それぞれの単元の中で、どのような国語の力を身につけさせるかを明確にしておく。「話す・聞く」「書く」「読む」国語の力は、「話す・聞く」「書く」「読む」言語活動を通してのみ育てることができる。どのような国語の力を育てるために、どのような活動をするのかが明確にされ

ていなければならない。(1)とも関わってくるが、「その子にとっての基礎・基本」である「話す・聞く」「書く」「読む」国語の力を、単元が展開される中で生きて働く力として身につけることができるような、単元を構想していくことが大切になってくる。また、「話す・聞く」「書く」「読む」国語の力が、生活の中で生きて働く力となるためには、生活的に学ぶ場、すなわち「話す・聞く」「書く」「読む」言語活動が結びつきながら展開される場を設定することが求められる。

(3) 単元を展開する中で、子ども一人一人が主体的・自覚的に学び続けようとする意欲・態度を育てるために、指導者の支援・働きかけのあり方を検討する。

○学習への課題意識を育てるための日常的な支援・働きかけ

○自らの課題へと高めるための支援・働きかけ

○課題を追求する中で、自らの学びを深めるための支援・働きかけ

○自らの学びを振り返り、確認するための支援・働きかけ

○学習終了後、学んだことが他教科等や生活の場などで生かされることへの見通しと、実際に生かされたことへの評価

(4) 主体的・自覚的に学ぶ力をつけるために、次の二つのことに配慮する。

○他とかかわり合いながら学ぶ力（相互啓発力）を育てる。

話し合いを通して他者と出会う中で、自己をとらえ直すこと、すなわち、自己を相対化し啓発していくことは社会的存在としての自己を育てるうえで大きな意味がある。他とかかわり合うための、対話力・問答力及び討議力が育つよう計画的に指導していかなければならない。

○自己の学びを確認する力（自己評価力）を育てる。

学習中での自己の取り組み方や考えたこと・頭をよぎったことなど、その一連の学習を振り返り、記録として残していく作業が必要になる。「学習の記録」をまとめ続けることを通して、自己評価力が育ってくる。

(5) 総合的な学習を視野に入れながら年間計画を立てていく。国語科で培われる力と、総合的な学習において育てられる力とは、互いに補い合い、生かし合い、高め合う関係にある。国語科で学んだことが総合的な学習の場で生かされるよう、あるいは、総合的な学習で高まった関心・意欲を受けて、国語科の学習が展開されるよう、年間計画を工夫しなければならない。今後、国語科をベースとした総合的な学習の開発に取り組む必要がある。その際、学校図書館の利用は欠かせないこととなる。学校図書館の充実とともに、図書館を効果的に利用する力をつけることができるような機会を年間計画の中に位置づけていきたい。また、本県で広く利用されている『作文読本』は、総合的な学習における表現活動を支えるものである。『作文読本』の効果的な利用も、年間計画の中に位置づけていきたい。